

---

# 探偵のような

酒井 薫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

探偵のような

### 【Nコード】

N3065Z

### 【作者名】

酒井 薫

### 【あらすじ】

ちよつとスカした青年が事件に巻き込まれて……。

## 依頼者

年末の小雨が降る朝のことだった。その女はアパートの外階段のそばに姿を現し、それからすぐに俺と目が合って、少し困惑した表情をみせた。

俺は用事を済ませて事務所を立ち去るところだったのだが、女の様子を見て、彼女から話しかけられるのを待った方がいいと直感的に判断した。

「あの……そちらの探偵事務所の方でしょうか？」緊張した様子を隠しきれずにその女は言った。

俺は当たっても外れても得しない勘だけはいつも鋭い。

「そうですか」

女の見た目はかなり若く、まだ十代の後半ぐらいで、自分と同世代のように思えた。黒いロングコートの裾から濃紺のスカートが覗く服装のせいなのか、年齢の割に地味な印象だった。もっとも、俺の服装もスカート以外は似たようなものだったが。

「相談したいことがあるんですけど……」

彼女の消え入りそうにか細い言葉の語尾が、微かに震えたように聞こえた。その震えが寒さからくるものなのか、他の理由によるものなのかは分からなかった。

「調査の依頼ということですか。詳しい話は事務所の中で伺いましょう」

世間はクリスマススイブだからと訳もなく浮かれているようだったが、依頼を受けて浮かれる探偵などこの世に存在するのだろうか。彼女がサンタクロースからの少し早めの贈り物だとすると、サンタは届ける相手を間違えたことになるかもしれない。ここは俺の兄が経営する探偵事務所で、その兄は現在入院しており、俺は卒業の目処が立たない大学生にすぎなかった。

アパートの廊下では白い息と朝靄が邪魔をしてはつきりとはわからなかったのだが、斉藤郁と名乗る18歳の女子大生は、とても美しい顔立ちをしていた。最近流行りの大きな目と、薄い上唇が特に魅力的で、俺の好みのタイプでもあった。

「依頼の内容を伺う前に、言っておかなければならないことがあります」

「なんででしょうか？」彼女はそう言って、やや不審そうな顔で首を傾げた。

「実は、この探偵事務所の経営者は俺の兄で、俺は探偵ではありません。入院中の兄に頼まれてここを訪れた帰り際に、あなたに出会ったことになります。そういうわけで、法律上の問題もあるので、あなたの依頼を俺が引き受けるわけにはいかない。だから、兄の退院を待つて出直すか、他の探偵事務所を探してもらうしかないんです」

現在の状況と自分の立場を彼女に伝えたのだが、本心は言わなかった。

彼女は、多少の戸惑いと納得とが入り混じったような表情をして、俺の顔を見つめていた。ここで俺は、彼女が”かわいらしい”と、あらためて思ったのと同時に、自分の容姿にそこそこの自信があったことを思い出し、軽く微笑んでみせた。

「そうだったんですか。でも……そうですよ、いきなり押し掛けて、申し訳ありませんでした」

彼女はそう言うと、ドアのほうへと歩きだした。

このまま彼女を見送るのが、この場合最も正しい対応だと思った。探偵事務所を訪れる若い女などにロクな奴はいないだろうし、明らかに彼女は、'ワケあり'だと感じてもいた。しかし、どうやら世間だけでなく、自分にも少しは浮かれたところがあるらしい、そういうことにした。

俺は彼女の儂げな後ろ姿に向かって話しかけずにはいられなかった。

「斉藤さん」

彼女は足を止め、振り向いた。

「余計なお世話かもしれないけど、俺があなたの調査を手伝うことはできません。仕事としてではなく、あくまで個人的にということなら……」

「えっ、いいんですか？」

「兄の不在が理由で困っている人を、代わりに弟が助けようとしても、それほど異常なことではないでしょう」

好意については言えるわけがないのだった。それこそ、どこかに異常でもなければ。

「あなたにとつては迷惑なだけでも？」そう言って、彼女は薄く微笑んだようだった。おそらく、今日になって初めての笑顔なのだろう。

「それは構わないですよ、内容にもよるけど。ではさっそく、依頼について話してもらえますか」

## 依頼

斉藤郁の話は以下のようなものだった。

彼女は同棲している12歳年上で建築作業員の恋人の様子が、一か月ほど前からおかしいと感じ始めた。浮気をしているのではないかと不安に駆られた彼女は、昨夜、我慢できずにととう彼氏を尾行してしまふ。彼女としては、浮気相手の存在が明らかになればその場で別れを決める覚悟の上だったらしい。しかし、彼女の予想は外れる。

家を出た直後からうなだれた様子がみてとれた彼氏は、繁華街の怪しげな路地裏へと向かい、そこで、見るからに怪しげなチンピラ風の男の二人組となにやら話しを始めた。それも、肩を小突かれたり足を蹴られたりしながらだそうだ。ヤバイことに巻き込まれているのは確実だろうから、彼女は警察に通報することを考えてみた。しかし、彼氏の側に落ち度がないとも限らないし、なによりも報復が恐ろしいためにその場では決断できなかつたらしい。女が一人でどうにかできる状況ではないので、とりあえず自宅に戻ることにして彼の帰りを待った。彼は、彼女の帰宅から遅れること数時間後に無事戻ってきた。

彼女は一晩じっくり思い悩んだあげく、翌朝になり彼氏が出勤した後、自宅から最も近くにあつたこの探偵事務所へ相談に行くことにした。今に至る経緯はそういう感じだそうだ。

俺は彼女の話の途中で、「ごめん、急用を思い出したんだ。依頼は他の探偵さんにあたってみてよ」というフレーズを、三回ほど言いたくなつたのをどうにか抑えつつメモを取りながら最後までなんとか聴いた。

それで、肝心の依頼の内容だが、30の男がチンピラと揉めている事と、18の少女が年上の男と同棲する事。どちらがより危険

なことだろうかとふと考えてみた。答えは明らかだと思っただが、それを今ここで彼女に指摘しても無駄なのだろう。

「彼氏から直接話を訊くわけにはいかないの？」

「危険な事に巻き込まれている場合、彼はきつと、私には本当のことを打ち明けてくれないだろうと思っただんです」

「なぜ？」予測できることではあったが、念のために尋ねた。

「私に危険が及ばないようにとか、男としてのプライドを守るためですよ。男の人が考えている優しさって、結果的には相手を傷つけることが多いじゃないですか。私のことをホントに大切に考えてくれているんだつたら、つらい時こそ打ち明けてほしいのに……」

彼女の男性考察には一理あるのかもしれない。しかし、俺にとっではどうでもいいことだった。それにしても、どうやら依頼者の愚痴を穏やかに受け止めてみせることも探偵の業務に含まれているらしい。兄も大変なのだろうかと少し同情する。

「彼の身の安全が確保できればいいわけですよね」

彼女はそういうことです、と言いながら軽く俯いた。

俺は具体的な調査方法について考えてみた。しばらく考えてみても、頭に浮かんだのは尾行、聞き込みの二つだけだった。

この件について兄に報告するべきかどうかについても考えた。仮に兄が反対したとしても、俺はたぶん調査を続けるだろう。理由は自分でも上手く説明できないのだが、何となく嫌な予感がするからだろう。兄に無駄な負担をかけるのも避けたかった。

「もう一度、彼氏を尾行しましょう。そうやって、掴んだ情報から対策を考えるしかない」

「わかりました」彼女は顔を上げ、真剣な表情と声で言った。愚痴を言った後の女が大体そうであるように、彼女は迷いを吹っ切ることができたのだろうか。女はめんどくさいものだったと思いついた。

尾行のチャンスができれば、俺の携帯に連絡してください。連絡を取り合いながら合流します。と俺が言うと、彼女は一つ頷き、お辞儀をして事務所を去った。

大きく腕を伸ばしながら何気なく窓の外を見ると、小雨は粉雪へと変わっていた。俺の彼女への好意も、発作的で熱を帯びたものから冷めたものへと変わっていた。

俺は、自分が久しぶりにワクワクしていることにここで気が付いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3065z/>

---

探偵のような

2011年12月11日17時49分発行